

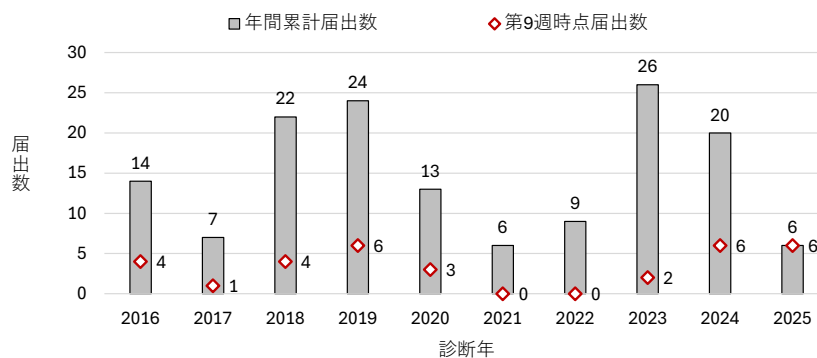
【今週の注目疾患】

《侵襲性インフルエンザ菌感染症》

2025年は第9週までに県内医療機関から6例の届出があった(図1)。性別は、男性2例、女性4例であった。年齢群は、10歳未満1例、70代3例、80代2例であった。

過去2年は直近10年間の届出数の平均を上回るとともに、今年も第9週時点の比較において、最も届出数が多くなっていることから、今後の発生動向に注意が必要である。

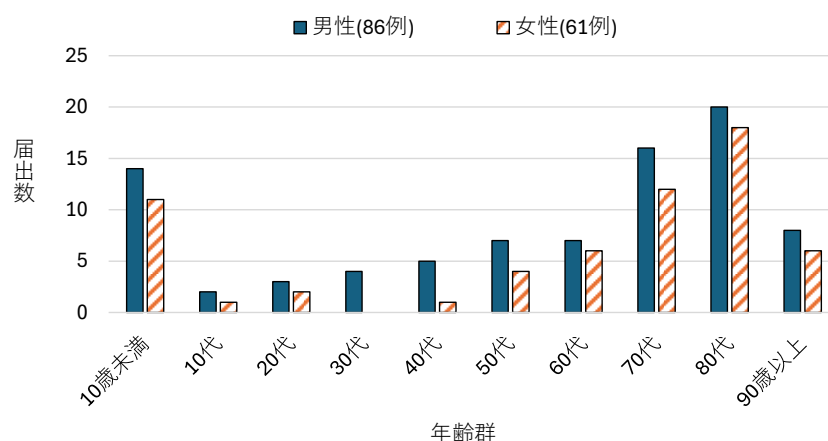
図1：2016年から2025年の県内の侵襲性インフルエンザ菌感染症の診断年別届出数(2025年第9週時点)



2016年から2025年第9週までに届出のあった147例の概要は以下のとおり。

性別は、男性86例(59%)、女性61例(41%)と男性が多かった。年齢群は、80代が38例(26%)、70代が28例(19%)、10歳未満が25例(17%)であり、小児と高齢者が多かった(図2)。主に乳幼児の重篤な感染症の予防を目的とするHibワクチンの接種歴において、接種ありの24例は全て10歳未満であった。また、接種回数では、4回が16例、3回が7例、1回が1例であった。

図2：2016年から2025年の県内の侵襲性インフルエンザ菌感染症の年齢分布(2025年第9週時点)



国内では2008年12月に任意接種としてHibワクチンの接種が可能となり、2013年4月に定期の予防接種に導入された。Hibワクチン導入により、5歳未満小児における侵襲性インフルエンザ菌感染症の罹患率が大幅に低下したことが報告されている¹⁾。

※Hibとは、インフルエンザ菌 (*Haemophilus influenzae*) のうち、小児における侵襲性感染症の主たる原因とされる血清型（莢膜型）の *H. influenzae* type b のことをいう。なお、型別不能株のことはNTHi (non-typable *H. influenzae*) という²⁾。

Hibが起こす侵襲性疾患は多くの器官に及び、菌血症、髄膜炎、急性喉頭蓋炎などがある。Hib菌血症は肺炎球菌による菌血症に比較して高率に髄膜炎などの合併や続発がみられる。髄膜炎の多くは発熱で始まり、けいれん、意識障害へと進行し、死亡に至ることもある。急性喉頭蓋炎は高熱、咽頭痛で発症し、急激に進行する気道閉塞により死亡することもある³⁾。

本疾患について、届出時点では血清型（莢膜型）別は多くが未実施のため、正確な血清型分布は不明であるが、国の感染症流行予測調査事業の報告において侵襲性インフルエンザ菌感染症患者から分離された菌の大半がNTHiであったことから⁴⁾、現在の届出の多くはNTHiによるものと推察される。

■参考・引用

- 1)国立感染症研究所：侵襲性インフルエンザ菌感染症発生動向：2018年1月～2021年12月
<https://www.niid.go.jp/niid/ja/typhi-m/iasr-reference/2606-related-articles/related-articles-515/11771-515r06.html>
- 2)国立感染症研究所：侵襲性インフルエンザ菌感染症
<https://www.niid.go.jp/niid/ja/ihd-m/ihd-iasrtpc/3719-tpc401-j.html>
- 3)厚生労働省：ヘモフィルスインフルエンザ菌b型（Hib）ワクチンQ&A
<https://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou/pdf/110228-2.pdf>
- 4)厚生労働省・国立感染症研究所：令和4年度（2022年度）感染症流行予測調査報告書
<https://www.niid.go.jp/niid/images/epi/yosoku/AnnReport/2022/10.pdf>

【Topics】

3月1日から3月7日までの7日間は「子ども予防接種週間」です

4月からの入園・入学シーズンを迎えるにあたり、必要な予防接種をすませ、病気を未然に防ぎましょう!¹⁾

■参考・引用

- 1)厚生労働省：令和6年度「子ども予防接種週間」の実施について
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000193336_00009.html